ねこみの
猫蓑通信

第３６号
平成十一年
（１９９９）
7月15日発行
（年４回発行）

芭蕉の初心

東　明雅

「句作りに技巧をこらし、句毎に景をこのんで作ると、すぐに古くなります。珍しすぎると飽く心が出ます。こざかしい句を出すと後の付句は詰ってしまって、身動きが出来ぬようになるでしょう。地味な付合をよく続け、処々に風景の句をすこし入れて行かれたらと、今後の俳諧のやり方を考えている次第です」

右は貞享三年（一六八六）三月十四日付、芭蕉が熱田の門人、東藤・桐葉に示した手紙の一節を口語訳したものである。

このころ、芭蕉は貞享元年、「野ざらし紀行」の旅に出て、「冬の日」五歌仙を興行、これで俳諧における蕉風を確立する事が出来た。そして貞享三年には、発句においても、蕉風開眼の句と言われる「古池や・・・」の句が作られ、俳諧師として、これから俳壇に活躍しようとする頃であった。その彼が今後の自分の俳諧のあり方をはっきり自覚し、それを弟子たちに伝える形で示したのが、この手紙だったのである。

それにしても、この一文の中で、景の句、あるいは風景の句と言うのは何だろうという疑問が湧くに違いない。現代連句では、景の句・風景の句とは単なる叙景句、いわゆる人情なしの句で、これを続けると変化が乏しくなるという理由から、二句で止めるのが通例である。ところが連歌あるいは俳諧における景の句・風景の句は、単なる嘱目の自然風景ではなく、その景の中に一曲ある、即ち、表面は景を詠んでいるが、その底におもしろさのひそんでいる、いわゆる景曲体の句である。これは何句続けてもよい事になっており、元禄俳壇の流行りであった。蕉風の展開も、この景気の流行に平行したものであった。

蕉風の展開については、「冬の日」調時代、「猿蓑」調時代、「炭俵」調時代（後述の「別座舗」もこの中に含む）の三変説に従うけれども、杜甫・李白の境地にあこがれる脱俗・風狂の「冬の日」（貞享元年）

盗人の記念の松の吹をれて　芭蕉
しはし宗祇の名を付けし水　杜国

定家・西行の古典的世界と庶民の日常的世界を調和させた花実兼備と言われる「猿蓑」（元禄三年）

堤より田の青やぎていさぎよき　凡兆
加茂のやしろは能き社なり　芭蕉

と、それぞれの風趣は異なるけれども、一句の作り方に技巧をこらして、景の句を作っていた事においては同じであったのである。

許六の「宇陀法師」（元禄十五年）には、「景気の句を、世間ではたやすく作っているが、これはもっての外の事である。概して景の句は古い」と芭蕉は景の句をきびしく批判したと言うが、これは一体何時の事だったのだろうか。

その芭蕉は、彼の最晩年になって念願を達する事が出来た。元禄七年、最後の旅に出る彼を送る一座で、彼が江戸の門人らと巻いた「別座舗」の一巻に満足した彼は、「今思ふ躰は浅き砂川を見る如く、句の形・付心ともに軽きなり。某所に至りて意味あり」という言葉を残している。

同年六月二十四日、旅先の粟津の無名庵から、江戸の杉風にあてた手紙の中に、「別座舗」には上方の門人たちが驚嘆し、もはや拵え物の作品には飽き飽きした今日、俳諧はこのように軽く作るべきだと言っていると報告し、他門からも賞賛されたとよろこんでいる。

貞享三年、「一句の作り方に技巧をこらさず、地味な付合の中に新しさを求めよう」と自覚してから、元禄七年、この「別座舗」で意に叶ったものを作って満足するまで、およそ十年、彼は遂にその死を目の前にしてはじめて、初心を貫徹する作品を得たのであった。

俳諧彷徨記

星野　石雀

初めて俳諧の席に参じたのは、昭和四十八年万愚節の日であった。俳諧師野村牛耳という人を何となく奇異の感をもって眺めた。若い頃から俳句に精進したが、俳諧に関心薄かったから、廃れたる詩型式に執着している牛耳翁にいくらかの興味を持った。

　あたたかや寝そびれて噛む落花生　石雀
　　舷濡らし汲みし白魚　裕
　万愚節純金は今日より解禁に　牛耳
　　電気仕掛けの猿太鼓打つ　徒司
　驟雨きて巷洗へよ暑き月　三余
　　泉に映る淡き人影　ゆかり

が表六句。牛耳注によると、寝そびれているのは江上仮泊の人で、電気仕掛けの猿は、どこかのデパートの金解禁の宣伝という訳である。一応の予備知識と実作進行の雰囲気との不調和に多少の疎外感を覚えながら当日私はほかに「凧凌ぐ石臼の詩」「新酒一碗うかぶざれ言」と二句付け、牛耳宗匠に採られた。

翌月また出掛けた。申し遅れたが場所は牛込、高島南方子居である。

　石垣にシャム猫をおく薔薇館　石雀

「明るく美しい発句である」と牛耳宗匠御満悦であったと言えば自慢になるか。

以後、南方子庵主のところで度々俳諧を愉しんだ。会の名称は東京義仲寺連句会。三余鈴木助次郎が女子大生を多く連れて来て座に華やかさを添えていた。この会で婁々感じたことは、連衆が発句に悩んで仲々決まらず、加え表六句が揃うまで一座の凝りみたいなものが容易に解けぬ重苦しさであった。尤も表六句はあたしパスよなんて嘯く乙女もいたが。

月日若干流れて、いつか私は牛耳翁捌きの歌仙よりも林富士馬が提唱する胡蝶俳諧に親しむようになった。胡蝶は、表六句、中十二句、裏六句、一花二月である。歌仙三十六句を長いと思い、山葵の利かないやり句など、徒にその場の緊迫感を削ぐばかりなどと、短絡的思案から当時一途に胡蝶へ傾いていた。この心情を今日から顧みると、雑俳的要素への倦厭が募り、所謂純粋詩の結晶で短い鎖句をものしようという志向だったのではないか。

　屋根裏に獏を養ふ夏休み　石雀
　　斑の芥子の翳揺れやまず　秋
　巨き石貨離島の浜に埋れて　春眠子
　　狂ったピアノで「英雄」をひく　湧水
　午前4時の風呂のぬくみや後の月　春
　　あかねの壺のあかきふくらみ　同

私捌きによる胡蝶『獏』の表である。果してどの程度俳諧精神と詩性の抱合がしっくりいきそうな気配が窺えるかどうか。何しろ私も未だ血気衰えざる頃おいで、腸詰俳句好みの悪癖もあり、座の文学の遊びを味わう心のゆとりに欠けていた。そして尚鎖句凝縮気分昂進するうち珍田弥一郎提唱のソネット俳諧にも共鳴した。四・四・三・三、ペトラルカ式である。「橘の林にこもり夢較べ　石雀／白南風はこぶ少女の口笛　洋太／牧神に踏まれて泥をうれしがり　弥一郎／麝香の瓶に茜さすころ　博之」、これ亦風狂彷徨の断片か。

今、林富士馬の俳諧俳論集『行行子』の中の短章「牛耳忌」を読み、懐旧の情に浸っている。渋谷の婦人会館での歌仙の後、それは二月の雪残る寒い日で、牛耳翁は杖をついて歩道橋を渡っていった。茶房では老酒を飲み元気そうだったが、俄に年とった風にも見えた。翁が病床の人となってから私は月々の義仲寺連句会の模様を葉書に細字でしたためて通報した。俳諧熱高かった余りだ。

更に歳月流れて、東京義仲寺連句会も回想裡の点景と化している。私も東京在住時は草庵に連衆を招き、家内は煮物などして賑やかに歌仙を仕上げたものだが、田舎に引込んでからは、俳諧は岩波文庫の『芭蕉連句集』を努めて読むようにしている程度である。しかし、世間では連句は盛んらしく、各種連句会開催の案内など郵便受に舞込んできている。ここで私など不思議に思うのは、連句会で選者数名による作品選考を行うことである。元来自由狼藉の世界と言われる座の文学が用紙に写されて、成立の折の捌き手、連衆の息遣いの消えた字面のみ見詰めて、想像力を働かせたとしても自ずから臨場感湧く訳ではなかろう。俳諧は文台下せば反故かもしれない。

第三回熱田神宮奉納正式俳諧を終わって

細川　研三

桃雅会による第三回正式俳諧を平成十一年五月十五日、燃え立つような新緑の杜熱田神宮龍影閣において興行し、めでたく奉納することが出来ました。

会は打ちそろっての神宮お垣内参拝に始まり、会場にて東明雅先生による「正式俳諧とその歴史」のご講義を拝聴した後、いよいよ正式俳諧の興行となりました。執筆は前二回は杉山壽子代表が勤めましたが、今回は実家の土蔵から発見されましたご先祖様の二見形文台を持参されての高橋良風氏が受け持たれました。席入りも済み一同着席となりましたが、熱田神宮奉納のため献香に代っての玉串の奉奠とて巫女さんの緋の袴が色鮮やかに目を引きました。文台捌きは執筆が男性のために、きびきびとした動作で進み、いよいよ二十韻の興行となりました。

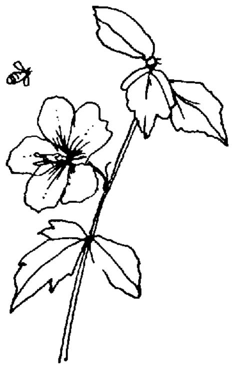
大楠や神の息吹の風薫る　明雅
卯波さ波の寄する渡場　和子

の熱田神宮と近くの東海道七里の渡しの句に続いて次々と句が付けられ、花の句の前では榊による玉串が神前に捧げられ

奉納の熱田あたりは花万朶　壽子
道の狭しと立てる雛市　執筆

と二十韻「風薫る」の一巻が巻き上がりました。端作りを終え、吟声が重々しい声で会場に響き荘重な気分に浸りました。文台返しから作品奉納も無事済み、めでたく興行を終わることが出来ました。

最後になりましたが、東明雅先生、式田和子先生には一方ならぬご指導を頂き厚く御礼申し上げます。特に和子先生には数回にわたり遠路名古屋まで御出頂いてのご指導、本当に有り難う御座いました。



一字が万字

佛渕　健悟

『猿蓑』に「この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角」という句が載っている。この句は初め「柴戸」であったところ、「此木戸」と、此と木を離して読む方がいい、印刷に入っていようとも改めるようにと、芭蕉が直させた句であることが『去来抄』に出ている。

表現者の執心を思うと同時に、編集をするものは一字一句を大事にせねばいけないと、身にしみるエピソードである。

拙句の例だが、「中卒いえず肩抱かれし」という付句が、「卒中いえず」となっていたことがある。これなどはご愛嬌の内で、以前、俳誌に出した「天上天下唯我独存大嚔」が「唯我独尊」とヘンシンしており、作者の鼻息の荒さを天下に示す格好になった。ワープロが勝手に鑑賞してしまう落とし穴である。

よそ様の原稿を打っていてまちがう場合、大事に思う余りのあまのじゃく、という皮肉なケースが少なくない。文字の裏に潜んでいて、字を入れ替えたり、字を隠してみたりする、そんないたずら好きな小鬼を私はいつも思い浮かべるが、なるべくならまちがいをこの小鬼のせいにはしたくないと思っている。

第十三回亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧

	次第	役割	
一	席改め		
二	席入り	宗匠	市野沢弘子
三	配硯	副宗匠	上月　淳子
四	献花	執筆	梅田　利子
五	執筆呼び出し	知司	高橋　豊美
六	文台捌き	副知司	橘　文子
七	俳諧興行	同	八代　嫋
八	花前	座配	田村　満子
九	玉串奉奠	座見	島村　暁巳
十	花の句披露	花司	久保田庸子
十一	端作り	配硯	松本　碧
十二	吟声	同	橋野代々子
十三	文台返し	同	本田　弥生
十四	作品奉納	老長	中田あかり
十五	納硯		
十五	挨拶		
十六	退席		

平成十一年四月二十五日
於　江東区亀戸天神社

藤祭り奉納
俳諧之連歌二十韻

吟声の池に響くや藤祭り　明雅
　双蝶の舞ふ反橋の上　淳子
春障子触るれば軽く滑りゐて　あかり
　ヨガのポーズを一寸真似する　碧
ウ
地ビールを嫦娥に捧ぐ月間賞　暁巳
　振り向かせたき髪洗ひをり　嫋
父母に背き神に背くとも　庸子
　大海原に漕ぎ出す舟　文子
ガイドライン何処へ引いても割り切れず　久美子
　猫がひっかき鴉ついばむ　豊美
ナオ
いつしかに増えし萬両実を結び　美恵
　人気上昇雪の温泉　弥生
演し物にまた股旅の忠太郎　政志
　古傷癒すねんごろの月　一恵
隠し持つ残りの媚薬うそ寒し　満子
　フェードアウトの晩秋の峰　英子
ナウ
喜寿祝ふ齢これより引き算で　澄子
　貝の欠伸に眠気誘はる　美奈子
嫋々と笛の音流れ花吹雪　弘子
　古都の甍に立てるかぎろひ　執筆

平成十一年四月二十五日
於　亀戸天神社

執筆役を終えて

梅田　利子

Q　執筆役無事終わってよかったですね。
A　どうも有難うございます。
先生御夫妻はじめ、諸先輩の方々にご指導を頂き、何とか穴をあけずに終える事が出来てほっとして居ります。
Q　執筆役をやって何か感じた事は？
A　正式俳諧は一時間と少し掛かります。意外と体力が要るなと思いました。何しろ齢ですので足が痺れたり、もたついたりしないかと一番気になりましたが、芭蕉様天神様が見守って下さったお蔭で無事に済みました。
文台捌は、無駄のない流れる様な美しい所作の構成で、特に硯箱の蓋の塵を払う動作、水引や懐紙を捌く動作など、練習で無心にやって居りますと、自ずと背筋も伸びてとても好きな動作です。俳諧という文芸と神事を合体させ儀式化した日本人の美意識のすばらしさを感じました。でも本番は凡人の哀しさで、平常心はどこへやら、手が振るえて困りました。本当によい勉強をさせて頂きました。
Q　点数を付けたら何点位？
A　ええと一生懸命やった所に免じて七十点位でどうでしょう。えっ甘い！　お粗末な執筆役でご勘弁下さい。お後が宜しい様で。

二十韻「広重の藤」　東　明雅　捌

広重の藤がそのまま眼の前に　明雅
亀鳴きしかと覗く反橋　志津香
ふらここの子の歓声の響き来て　ゆみを
パソコン教室おきまりの席　文子
ウ　流れゆく雲間の月の窓あかり　由美子
菊人形は半身装ひ　美保子
君のみを見つめてゐたる秋狂言　文
ほんにひとりとヴィオロンが哭く　由
ブローニュの森黝々と酌むワイン　香
誰もしらない溜塗りの轎車　を
ナオ　僧正は襟を崩して渋団扇　保
新任都知事かなぶんに似て　由
黒袋ダメです透明袋です　香
ダイエット中おろす雪鍋　文
布巻いて刃物眠らす寒の月　香
しがねえ恋は嫌でござんす　を
ナウ　老いぼれし情夫(いろ)が大屋根飛びそこね　文
ついておいでと招き猫呼ぶ　保
それぞれに妍を競ひて花の山　文
土の匂ひを胸にいっぱい　由

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　山元志津香　青島ゆみを　橘文子
野崎由美子　中森美保子

二十韻「千条の藤」　青木　泉子　捌

千条の藤ゆたけしや太鼓橋　泉子
のどかに亀の憩ふ石の上　郁子
青海苔を軽く焙りて酢の飯に　美奈子
オセロゲームを競ふ父と子　将義
ウ　月の暈路地に近づく靴の音　あかり
化粧直して待てるやや寒　郁
秋狂言二枚の切符握りしめ　り
ポイ捨て禁止駅の構内　美
最新のバリアフリーに改築し　義
留学決まる冬の倫敦　り
ナオ　御陵の衛士のごとくに雪積り　義
お国訛りで酌み交す酒　郁
割勘ときけば消え去る人のゐて　義
のっぺらぼうかまたは河童か　郁
息づきし羊歯の若葉を撫でる月　美
愛の讃歌をふさぐ唇　り
ナウ　大刀をしごいて香具師の油売　美
自分史出版われもわれもと　り
佳き友と京のお寺へ花の旅　郁
記念撮影笑ふ山々　義

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　東郁子　鈴木美奈子　川名将義
中田あかり

二十韻「藤かをる」　秋山　志世子　捌

しっとりと雨後のみ社藤かをる　志世子
亀鳴くを待つ池の朱橋　紀子
春スキーパンフレットを展げゐて　嫋
タバコの缶は兄のリュックに　英二
ウ　九十九折右に左に月めぐり　利子
湯女が顔出すやや寒の垣　嫋
外つ国の夫に仕送る小重陽　利
ダム放流に岸の溢るる　英
学会に鮎の博士と名の売れて　同
じんべ・すててこ僕の普段着　紀
ナオ　浅草のからくり時計人集め　利
金釘流の写経千巻　嫋
ラブラブの彼によく似た狸です　紀
官職捨てし恋の凍月　嫋
井戸掘を砂漠にするも苦にならず　英
馬頭琴鳴る悠久の時　紀
ナウ　詩を愛し酒を愛して五十年　利
仮寝の夢に故郷の山　世
SLの轟々とゆく花明り　紀
世紀を映し蜃気楼立つ　利

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　椿紀子　八代嫋　日高英二
梅田利子

二十韻「藤風」　浅賀 淑代 捌

藤風や無心所着の牛も来よ　淑代
　池のどこかで鳴いてゐる亀　瑞枝
夏隣マリオネットを教はりて　佳実
　主の好きな煎茶濃くいれ　蓉子
（ウ）底冷の路地掃き清め仰ぐ月　昌子
　奈良井宿まで追へる掛取り　蓉
抱擁のこのまま消えてしまひたい　枝
　ブラックホールに吸はれゆく恋　蓉
半熟を上手に朝の目玉焼　実
　金正日（キムジョンイル）の見てる電映　枝
（ナオ）萬緑は螺旋階段あをく染め　蓉
　華氏八十度曇りのち晴れ　実
サッカーのアンダー⑳準優勝　枝
　うどんがそっと届く下宿屋　昌
後れ毛の衿なまめきて秋袷　同
　近き別れは月読みの占　枝
（ナウ）CDの「火焔太鼓」で新酒酌み　昌
　力を込める臍下丹田　実
花びらを乗せし方船押し出す　蓉
　鳩の行方に霞たなびく　執筆

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　大窪瑞枝　有田佳実　五味蓉子
中野昌子

二十韻「藤祭」　式田 和子 捌

かけまくも猫もかしこき藤祭　和子
　亀も鳴くかや古式俳諧　康子
雛段の隣りに吾子のすましゐて　鶴鳴
　正座続けて眼白黒　俊子
（ウ）球状の展望ルーム夏の月　洋子
　チャイナドレスの裾の涼やか　康
この恋は微分積分割り切れぬ　洋
　ひとり訪ぬる遙かなる寺　鳴
生涯を離島医療に捧げむと　康
　渡船待つ間の焚火くすぼる　俊
（ナオ）初風呂はバスクリンにて紫に　鳴
　少女のミイラ生贄の果　洋
空爆を物ともしない大統領　鳴
　勧善懲悪漫画読む月　同
紅葉散る絵島生島しのび逢ひ　俊
　閨の奥にも鹿ぞ鳴くなる　鳴
（ナウ）ルーペ持ち確かめる癖老いてなほ　康
　微塵にきざむ枝のあざやか　洋
吉報に祝杯上げる花の村　康
　春日傘さす山の辺の道　俊

平成十一年四月十五日　於　亀戸天神社
連衆　狩野康子　井上鶴鳴　三木俊子
垂石洋子

二十韻「藤祭」　島村 暁巳 捌

撫で牛の重き瞼や藤祭　暁巳
　鼓打つ音ゆるくのどらか　久美子
木の芽漬ゴルフ仲間と味見して　政志
　土間にころがる瓶を目ききす　壽子
（ウ）望の月なかなか消えぬ国訛　如代
　不貞に馴れる闇に虫籠　同
色街はぬた場の泥よ西鶴忌　志
　深酒に効くお茶に梅干　久
ペイオフは千万までとささやかれ　同
　托鉢僧は鍼灸の師　壽
（ナオ）電線に通し燕が増え続け　久
　だんご舐って子等と観察　志
ワープロに言えない言葉叩きこみ　代
　衝動買ひの媚薬溜って　壽
羅を身内の鬼が突き破り　代
　馬手と弓手で汗疹搔きやる　壽
（ナウ）バスガイド同窓会の屋形船　久
　人力車夫は役場職員　代
老母の満面の笑み花の奥　久
　巣藁咥へて雀飛び去る　代

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　副島久美子　峯田政志　杉山壽子
伊勢本如代

二十韻「藤浪に」　鈴木千恵子　捌

藤浪に映ゆるや浅葱禰宜袴　千恵子
　のどかに眠つむるなで牛　好敏
弥生尽特急バスは満席に　孝子
　うたふカラオケすすむ酒盛り　要子
ウ　たご蛙低音がよし雪に月　澄子
　雑魚寝のすきにそっと抜け出す　敏
ひと筋の髪を証拠に詮議立て　孝
　泰西名画嘘も交れり　澄
フィレンツエの丘軽やかに鐘響き　孝
　大道芸に弟子入りをする　敏
ナオ　運わるく鬼の霍乱町医待つ　澄
　脱ぎし下着よ蝉の殻どち　敏
少年A心のうちを明かしかね　要
　愛のむなしく色ながら散る　澄
月光は兵士の夢か厳島　孝
　秋時雨して雨宿る鳩　要
ナウ　まづいてふ青汁呷る悪役は　敏
　バンドエイドで伸ばす目の皺　孝
花浴びて街中を錬る親子獅子　要
　故郷の川は鮎の放流　澄

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　豊田好敏　坂本孝子　山本要子
八角澄子

二十韻「反橋や」　橋野代々子　捌

反橋や歩巾短に弥生盡　代々子
　藤浪ゆるる野点毛氈　志げ子
春眠の囁く声は誰ならん　哲
　子のヴァイオリン覚束無げに　碧
ウ　夕涼み下駄で踏み行く月の影　真紀子
　彼に貰った香水をつけ　一恵
待つと言ふ静かな武器も女ゆゑ　げ
　怨嗟を秘むるコソボ国境　碧
書を捨てて夢も捨てしよ山頭火　紀
　甘み押へて煮物炊き上ぐ　恵
ナオ　辛口を友と一献酉の市　げ
　困る注文足袋を手縫ひで　碧
フラダンス習ふわたしは絵のモデル　恵
　慕情のままに愛づ草泊　哲
渡し船月に舵取りゆづれども　碧
　駿馬の越ゆる爽涼の埒　紀
ナウ　パソコンのキーを片手で打つお婆　同
　朱鷺のひよこの色を知りたく　恵
旅路来て花にたたずみ癒されぬ　哲
　鐘も朧にひびく遠嶺　げ

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　蒲原志げ子　中川哲　松本碧
中川真紀子　山崎一恵

二十韻「藤の社」　日高玲　捌

雨の香もすがしき藤の社かな　玲
　いとものどかに眠る撫牛　千町
春スキー誘いのメール来るならん　路子
　劇画片手に萁火を付け　敬子
ウ　下宿屋を捜す左岸は夏至の月　守男
　飾ってあげる胸のハンカチ　さえ子
幕間に彼と分け合う砂糖菓子　敬
　〆切迫る連載の稿　町
遠山を出でし三筋の道見えて　さ
　赤帽さんの待っていた駅　路
ナオ　鮟鱇の口も乾くか副都心　同
　ボーナスカット寒き懐　敬
日本史の書き換えとなる骨を堀り　町
　臥所の中で出自明かされ　さ
満月となりて狂うて心中沙汰　町
　いとどの髭が動く節穴　男
ナウ　不揃いのむかごに粗き塩を振り　さ
　酒量いささか減りし姑　町
ボールひとつ乗せてゆきけり花筏　路
　鼠鳴きやまぬ藪の子雀　男

平成十一年四月二十五日　於　亀戸天神社
連衆　原田千町　倉本路子　須賀敬子
近藤守男　難波さえ子

二十韻「春の夢」　佛渕 健悟 捌

菅公としりとり競ふ春の夢　健悟
都忘は双軸の前　英子
抱卵期朱鷺も卵を産み初めて　麻子
テレビニュースの声の朗らか　祥司
ウ 夏祭り果てて月夜の下駄の道　道子
蛍の原に肩を抱かるる　安子
眼の碧き君は源氏を熱く読み　麻
だんごの串を置いて淹れる茶　麻
子を隠す一子制度の憐れにて　英
黒いファイルを覆ふ雪虫　道
ナオ 鼬・貂昔男の襟巻に　麻
柔伝へて巡る東欧　悟
二十ものカードを持ってどうするの　道
ワイングラスに揺れる黄昏　司
あの月を取ってと駄々を捏ねる娘も　安
又振り返る霧の停車場　司
ナウ 金柑を含み出てゆく喉自慢　安
師匠譲りでうまく笑はせ　英
花遅きうこん桜の古舘　麻
井戸茶碗にて掬はせる蝌蚪　執筆

平成十一年四月二十五日　於 亀戸天神社
連衆　佐古英子　上月麻子　村上祥司
加藤道子　神谷安子

二十韻「藤の房」　吉村 ゑみこ 捌

門前町戸毎に飾る藤の房　ゑみこ
亀の御池を渡る柔東風　蘭石
のどかに兄はギターを爪弾きて　庸子
料理番組レシピ書き留め　豊美
ウ 甘酒を飲めば月ある昼日中　千寿子
夏の館で恋の鞘当て　石
静や静別れの刻を舞ひ納め　美
烏帽子岩まで犬とお散歩　石
エスカレーター東京人は左乗り　庸
ガセネタ追って刑事聞き込み　同
ナオ 鮟鱇を捌きし腹に暗号が　寿
凍土の果ての石油発掘　美
洋服はファッションショーで見立てさせ　寿
気紛れ女神抱く深秋　石
月青し間夫は煙草をくゆらせて　庸
山霧はれるもののべの道　同
ナウ おくどさん守って夢はささやかに　石
知らぬ人にも軽く挨拶　美
雨垂れに何を肯ふ花の揺れ　石
春の蚤でもゐれば賑やか　寿

平成十一年四月二十五日　於 亀戸天神社
連衆　井上蘭石　久保田庸子　高橋豊美
紺野千寿子

二十韻「雀らも」　和田 順子 捌

雀らもはづみやまざり藤祭り　順子
小橋うららか池のさざ波　弥生
ヴィオロンに春の音色を惜しむらん　慎二
文字の形にクッキーを焼き　凡
ウ 月光の漏れくる窓の青簾　弘子
寄り添ひ歩く短夜の影　慎
できちゃった婚でやうやく嫁となり　弘
実弾が飛ぶ佐渡の沖合　慎
宿願の村会議員に当選し　弥
電子メールで噂広げる　凡
ナオ 寒灸大きな痕を見せ廻り　弘
老い母の世は雪女郎ゐて　凡
新発意（しんぼっち）念仏何故か落ちつかず　弥
猪の寝坪を借りて逢引　凡
デジャビュかと思ひしまろき月に酔ひ　同
冬の支度の遅々と進まず　弘
ナウ 広縁におはじき遊びの子供達　弥
歴史塗替へ発掘の土器　順
スケボーで花のトンネルくぐり抜け　弘
五色回せる風車売り　凡

平成十一年四月二十五日　於 亀戸天神社
連衆　本田弥生　鈴木慎二　中川凡
市野沢弘子

連句への道（3）

上月　淳子

私がＡＣ連句教室に入ったのは、明治以来衰退していた連句が丁度復興期に入って暫くの頃だった。全国にいろいろと新しい連句の結社も出来、国民文化祭にも連句部門が認められ、年々参加者が殖え御同慶の至りであ る。しかしながら裾野が拡がるのはいいが、中にはとても縦いていけないと思うものもある様である。

私は東先生が門下として置いて下さる限り、翁の不易流行を根本に置き、また守るべき式目をきちんと守り、「歌仙は三十六歩なり。一歩も後へ帰る心なし」を胸に、作品を作り度いと思う。

① 俳諧は付けと転じと云うが、それがなかなか難しく、初心の頃はとかくベた付、しかも物付になってしまい、心付、匂付等は、何処でどう付いているか、考えてしまう。そして転じとなればなお難物で、今もって苦労であるし、また初心の方に教えるとなると、これが一番の関門で、此処を越えて貰うのが一仕事である。この付と転じが付過ぎもせず、また突拍子もなく離れもせずよく転がって行くことが、まず大切である。

② 次に自他場を守ることである。他の大会等に行くと、全然おかまいなしの所も沢山あるが、私は、自、他、自他半、場を考えて捌いていくことで（出句することで）自然と変化が付き、作品の流れが出来て行くと思う。人事句ばかりで重くなって、粘って来たら、そこでさらっとした場の句が出ればすっきりするし、自ら転じて行くのである。

③ 次に歌仙は能や芝居で云われる序・破・急に例えられるが、これも古風なことなどと云わず、現代連句でもしっかり守られて然るべきと思う。表六句が序。発句から始り、原則として神祇、釈教、恋、無常などは出さず、おだやかに運び、裏と名残の表が破の段で、様々な禁忌も取れ、名残に入ってあばれて面白く興を尽くし、急でまた静かに舞い納めることになる。

④ 捌となった時心掛けていること。先ず公平であること。始めは一巡であるから、連衆から一句ずつであるが、その時脇は同時同刻と云うのは無論で、三句目で大きく転じ、四句目は軽くと云うのが常道である。一座のお顔振を見渡し、もし初心の方が入ってらしたら、一直してでもなるべく軽いところで、早く一句頂いて気を軽くして差し上げる様にしている。これで楽になって後はどんどん句が出ることがよくある。

始めは静かだった一座も、お弁当が出、お酒が出るようになると、自ずと賑かになって来るが、その時連衆を載せると云ったら言葉が悪いが、特定の方だけが楽しいのではなく、皆で楽しく「さあいい句を出しましょう」と云う気分にさせ、捌自身も楽しく、うまく楫取りが出来、所々ワッと笑う様な句が出て盛り上り、また静かなしおりのある句が出されて、となればその一巻は成功であると思う。

打越三句がらみ、語尾の止め等、細かいことに気を配るのも、捌の役目である。恋句も二ケ所（二十韻も歌仙も）であるが、趣の変った句が欲しい。余り直接的でなくて、よく読むと成程なあと云うのや、ワッと笑った後でさび、しおりを感じるのとか。求めてもなかなか得られるものではないが・・・。

⑤ あまり定着していない新しい言葉、それと私の最も嫌いなのは勝手な造語である。今のように変化の多い世の中で、全然片仮名は使わない等と云えば、それは不易流行の流行の方に障ってしまうので、そこまで云う気はないが、言葉と云うものが動いている証拠の様なテレビを見た。私たちが普通に使っている「生さぬ仲」という言葉が分る人、分らない人半々位で、私も若いつもりでいたけれど我老いたりと苦笑いした。

何処かで山場を作り、さらりと流れる所をとは、云うは易く作るに難しである。

あれこれおこがましいことを云って来たが、私などやっと歌仙一巻気分がだれずに巻けるようになったところである。

（了）

英語連句の試み　花鳥風月（十）

浅賀　淑代

大蛍ゆらりくと通りけり　　一茶

A giant firefly:
　that way, this way, that way, this-
　　and it passes by.

　大きなほたるが、あっちへゆらり
　こっちへゆらり　またあっちへ
　ー　ほら　そこをとおって

（一九九九年六月、偕成社刊、R・ルイス編『E.J.キーツの俳句絵本』より）

　先日、市野沢弘子さんのご紹介で、「マイニチ・デイリー・ニューズ」ハイク欄選者などを勧められ、国際俳句事情に詳しい佐藤和夫氏にお話を伺う機会を得ました。

　ー　日本人は俳句というと、わび、さびの境地を想像しがちであるが、江戸期の俳句には翻訳すると優れた児童詩になるものが多い。・・（中略）・・俳句が翻訳されれば、俳句でなくなるが、別の一面が現れる。そのひとつが児童詩の要素なのである。そして、現代俳句よりも、江戸期の俳句に児童詩としてふさわしいものが多い。（同氏著、丸善ライブラリー『海を越えた俳句』）

　芭蕉の「古池や・・」の他に「水底を見てきた顔の小がもかな」（丈草）「うちとけて水と氷の仲直り」（貞徳）等を引いて、「日本の俳句に児童詩の要素があることはたしかである。」という佐藤氏の指摘に以前から関心があったので、上掲の絵本（いぬいゆみこ氏日本語訳）を手にお話下さった、海外でのハイク熱、小学校教育の事情などは興味深いものでした。「外国におけるハイクの将来は、むしろ児童詩にあるかも知れない」という氏の示唆には、レンクの将来の一面も思い合わされます。

　さて、二十韻「ねこの子」。

ナオ1　近づける悲劇も知らず踊りゐて　ハリー
　2　聖母子像に額づくは誰　碧

これに、いくつか付句とその英訳を頂きました。その中の二句、ナオ3

① 住込みの家庭教師の干す手巾　玲
　(the tutor is
　　hanging his handkerchief
　　to dry)

② ライオンも小鳥も驢馬も遠巻きに　紀子
　(at some distance
　　lions, birds, and donkies are
　　surrounding him)

　ともに転じが効いていて、新境地への展開が期待できます。治定は皆様に。それでは、付句をお待ちしております。

＊連句と酒＊

「居酒屋」　今宮　水壷

　飲み屋で、隣り合った客から話しかけられることは珍しくありません。話をするのは嫌いじゃないので気軽に応じます。客もさまざま話もさまざま。

　だいぶ前、一年くらいの間に、別々の店で、隣り合った客から武道家に見られたことが四回あります。

　一回目、「あなた何か武道をやっておられるんでしょう?」「は?何もやっておりません」

　二回目、「武道をやっておられますか?」「武道といってもいろいろありますが・・・」「棒術か何か」

　三回目「あなた何か武道を・・」「武道もいろいろ・・」「・・鎖鎌」（この方はあとで聞いたところ書家とのことでした）

　四回目「武道を何か・・・」「武芸十八般と言いますが、その中の何と・・・」

「・・・忍術!」

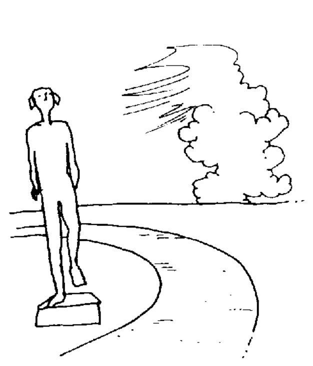
◇猫蓑会案内

○猫蓑会　江東区芭蕉記念館
日時　十月二十日　一時～
正式俳諧の後二十韻興行

▽深川連句　江東区芭蕉記念館
毎月第一日曜日（八月休み）

▽柏連句　柏市近隣センター
毎月第二日曜日（八月休み）

▽神楽坂連句会　新宿区神楽坂社会教会
館（東西線・神楽坂駅）
毎月第三土曜　十一時～五時（八月休み）



落語の猫

橘　文子

夏向きに怪談噺とくれば、筆頭はお岩さん、おせきさん、お露さん、豊志賀師匠と、幽霊の出番だが、猫だって負けちゃあいない。

「猫百伝」「鍋島の猫騒動」「赤壁明神の猫」などもある。しかし、猫の出てくる落語に、あまり怖い噺は少なく、むしろ人間の所業の方が怖い。「猫怪談」という噺にしてからが、肝腎の猫がはっきり姿を現さず、当時（寛永頃）の人達の、猫は魔物だから死んだ人の遺骸には近づけないことや、現在の倍以上も大きかった不忍池の辺りの夜分の怖さ、などが語られる。

ご存じ「甚五郎」は名人甚五郎の彫った福鼠が動けなくなったのは下手な彫り物師の彫った虎が猫に見えたからだったというオチ。

「猫定」　両国の回向院には、鼠小僧次郎吉の墓がある。その脇に猫塚があり、沢山の猫が葬られている。この噺の猫はその第一号で、八丁堀の玉子屋新道の魚屋定吉という遊び人に命を助けられた猫が、恩返しに、賽の目の丁半を「にゃん」「にゃんにゃん」で教えるという「狸賽」に似た前半と、命がけで敵討ちをした後半から成り、その敵討ちを、時の町奉行根岸肥前守が、猫ながらあっぱれと、二十五両で猫塚を建てたという。

「猫の皿」　道具屋が掘り出し物を探して地方を歩いていた。茶店でひと休みしていると、猫の餌入れが高麗の梅鉢という逸品。猫をまず三両で買い受け、「猫って奴は、食いつけない入れ物だと食わないというから、この皿も一緒に」というと、この皿は三百両もするからダメだと断られる。「なんでそんな高い皿で食わせるんだ」「へへへ、時々猫が三両で売れます」

「猫忠」　兄貴分の常さんが、お内儀さんに隠れて清元の師匠とうまくやっているのを見て、経師屋連（師匠をはり合う）や、蚊弟子（夏蚊が出ると夜業ができないから稽古に来る。蚊が出なくなると消えてしまう）の駿河屋の次郎吉、亀屋の六兵衛が大騒ぎ。よくよく調べてみたら、実は、三味線にされてしまった親猫を慕って、弁慶橋に住む吉野屋の常吉さんに化けた仔猫だった。この仔猫がただ酒を呑んだから「ねこただ」。師匠の名は文字静。余談。弁慶橋といえば赤坂見付と思うが、さにあらず、この噺の中の弁慶橋は神田和泉橋の通り、岩本町、松枝町、岩井町、横山町の四つ角のところを、昔流れていた藍染川に架っていた橋で、三方から渡れる珍しいT字型の橋だった。徳川初期の有名な大工の棟梁、弁慶小左衛門が苦心して考案した功績を称えて名付けられたという。

さて、この「猫ただ」、何のもじりでしょう？

質問コーナー

東　明雅

【Q】　芭蕉の恋句は、「さまざまに品変わりたる恋」を取材し、共感して描き出しているところに特徴があると言われます。それなら、同性愛といったようなものは「恋句」の範疇には入らないものかどうか。現代の連句はこうしたものを避けたがっているようにも見受けられますが、この点は如何でしょうか。

【A】　拙著「芭蕉の恋句」（岩波新書）の中（一八九頁）に、私は左の男色の付合二つを取り上げて、恋句として鑑賞しております。

①　むかし咄に野郎泣する　　許六
　きぬぎぬは宵の踊の箔を着て　　芭蕉

②　うつくしかれとのぞく覆面　　北枝
　つぎ小袖薫売（たきものうり）の古風なり　　芭蕉

元々、同性愛は中世の僧侶や武士に流行したものが、近世になって町人階級にも及んだものでありましたが、僧侶や武士は女色の享楽的・本能的要素に極めて否定的だったので、その代償とした男色には極めて倫理的・精神的要素を求める傾向が強く、衆道と称されておりました。

例に掲げた右の二つの付合も、男色を恋の好奇的な享楽的な現象として取り上げるのではなく、付句に箔の衣裳あるいはつぎ小袖を出す事によって、位を与え、むかし咄・古風という事をつける事によって、その賣色者に独自のしおり・寂を与えております。これは②と同じ巻の

③　遊女四五人田舎わたらひ　　曽良
　落書に恋しき君が名もありて　　翁

という恋句における遊女の描き方と全く同じで、賣色の人の性の相異による差は全く見られません。男色を詠む事をひけ目に思うどころか、むしろより共感しているような感じがするのです。尤もこれらの付合は何れも元禄期になってからのもので、②と③とは同じく元禄二年秋、おくのほそ道の旅の途中、山中温泉で曽良・北枝と巻いた「馬かりて」の歌仙（翁直しの山中三吟として有名）から取ったものであります。

元々、芭蕉は衆道は好きだったとも言われ、談林時代の桃青（芭蕉）の作品には、男色を題材としたものが多いけれども、それらの殆どは放埒・野卑ですから、黙殺する事に致します。

近代以後、同性愛は封建社会の遺物として嫌われるようになり、野蛮の弊風として軽蔑されるようになりました。現代連句でもゲイボーイ・ゲイバーなどが時々句材に出る位で、あまり同性愛の句は出ないのではないでしょうか。これはやはり近世期のような同性愛に対する共感がないからでしょう。私はそんなものは無い方が却っておもしろいと思うのですが。

◇　猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

一万円　川野嘉彦
　　都心連句会
　　木村恒雄（亀戸天神社）
一口　卯の花会　　（敬称略）

◇　基金の口座　富士銀行新宿西口支店
　　普通３３７６０４５　猫蓑基金

……§……§……

あとがき

○　声自慢のメジロの籠の上に、飼い猫が跳び乗った。びっくりしたメジロは声が出なくなってしまった。歌わねばはらのふくるるメジロかな。メジロの機嫌の直る日が来るのだろうか。

○　今年の梅雨は中国地方を中心に大きな被害が出ました。きわどいバランスの下にある現代の暮らしを思います。

○　夏本番です。飲み過ぎには気を付けたいものです。

季刊「ねこみの通信」第三十六号
発行者　猫蓑連句会
編集人　町田市金井6-7-6　佛渕健悟
〒一九五-〇〇七二
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ